8. 当科におけるカプセル内視鏡検査の使用経験

内科学（消化器）
山本義光，前田光徳，熊谷今日子，菅谷武史，中野正和，山浦知恵子，大木　了，塩屋知津，土田幸平，西福康之，松浦　晃，星野美奈，星野孝文，人見玄洋，小倉利恵子，富永圭一，岡本　裕，石川　潤，山形道子，中野道子，田嶋章弘，菅家一成，渡辺秀考，島田忠人，菅谷　仁，平石秀幸，寺野　彰
消化器内視鏡センター
中村哲也

【目的】小腸用内視鏡（PillCamTM SB, Given Imaging Ltd.：video capsule Endoscopy：VCE）は，2003年に当院が日本ではじめて施行した非侵襲性内視鏡である．今回当院における使用経験を報告する．

【方法】2003年2月から2007年11月まで獨協医科大学消化器内科で施行した135例（平均年齢51.7±20.5歳，男：女＝92：43）を対象として，通過時間，大腸到達率，診断，偶発症などについて検討した．なお全例当院における治験に対する承諾を得ておこなった．

【結果】検査施行理由として原因不明消化管出血や貧血が51%，つづいてクローン病精査が18%あった（現在，クローン病はVCEの禁忌となっている）．通過時間は，胃通過時間が53.0±66.9分，小腸通過時間が298.7±96.0分であった．VCE後診断として，小腸炎・小腸潰瘍が39%と最も多く，血管病変が23%，腫瘍が16%の順であった．原因不明消化管出血にて出血部位の同定ができた割合は，19.8%であった．偶発症として，機械の故障等物理的障害が0.7%，カプセル滞留により内視鏡・外科処置が行われたのは2.2%であり，滞留したすべての症例はクローン病であった．

【結論】VCEは小腸スクリーニング検査として有用であり，今後も小腸病変の検出におおいに役立つと考えられた．

10. 越谷病院における22年間の病理解剖例の臨床病理学的検討

越谷病院　病理部
鈴木　司，今井康雄，福田和仙，國實久秋，村上俊一，上田善彦
春日部市立病院臨床検査科病理
瀧本寿郎
済生会川口総合病院　病理部
佐藤英章

【目的】当院での開院からの病理解剖例を検討し，病理解剖の現状と傾向を把握し，今後の課題点を検討し，近年軽視されがちな今後の剖検に対する在り方について喚起する．

【方法】当院における1984年から2005年までの22年間の病理解剖症例1360例を，プロトコール，臨床診療記録及び剖検報告書を用いて臨床病理学的評価について検討した．主に剖検数，剖検率，科別依頼数，主病変の割合，臨床診断と病理解剖診断との一致，悪性腫瘍例の剖検例，救命センターにおける剖検例の特殊性，心血管疾患の剖検例，肺動脈血栓塞栓における剖検例などを中心に検討した．

【結果】当院での剖検率は最高値で47.6%であったが，近年減少傾向が著明に認められた．全症例のうち臨床診断と病理診断の主病変の一致率は83.4%であり，悪性腫瘍の割合が最も多かった．悪性腫瘍や心血管疾患領域での臨床診断と病理解剖診断の一致率は高い傾向にあったが，肺動脈血栓塞栓症などでは低下を示した．救命センターにおける特殊例では外傷，熱傷，中毒，溺水，熱帯熱マラリアなどの感染症が見られ，心肺停止症例に関しては病理解剖の適応とならず，行政解剖になった症例も見られた．

【結論】近年，全国的に剖検例の低下が見られ，当院でも剖検数が減少している．近年の医療機器の目覚ましい発展に伴い，剖検による病態解明といった医師らの要望が減少したためと考えられる．また，院内死亡者数などを考慮すると臨床業務に忙殺され，剖検による病態を追及する物理的時間不足の関与も推測された．しかし，研修医の教育，内科認定医，内科および病理専門医などの研修施設である当院では，臨床病理検討会の価値は非常に高く，当院全体として剖検率を上げる努力が必要と考えられた．また，多くの領域において剖検が生前の病態解明に寄与していると考えられた．